



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

2020年11月15日 年間第33主日A年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：箴言 31章 10 - 13、19 - 20、30 - 31節

第二朗読：テサロニケの信徒への第一の手紙 5章 1 - 6節

福音朗読：マタイによる福音書 25章 14 - 30節

## 今日のテーマ：光の子

三つの朗読から

第一朗読での「有能な妻」とは神の知恵のことです。有能な妻は働き、幸せをもたらします。同じように神の知恵も働き、幸せをもたらしてくれます。有能な妻をほめることは、神の知恵をほめたたえることなのです。

第二朗読に従えば「主の日」は必ずやってきます。暗闇にある人にとってはその日は突然やってくるものです。しかし、わたしたちは「光の子」ですから、その日が突然やってくることはないのです。

福音朗読に登場する主人は少しのものではない金額を僕たちに預けます。預けてくれた主人の気持ちを思うと、精一杯それに応えたいという願いが生まれるでしょう。それが、忠実さであり、主人に従うことの内容です。もうけた金額の多い少ないが問題なのではありません。

説教

1 タラントンは6,000ドラクメと等価です。1ドラクメは1デナリオン（ローマの銀貨）と等価で、1日分の賃金に相当します。1タラントンは16年分の賃金となり莫大なお金であることがわかります。「預けた」ことに注目しましょう。どのように使うべきかの指示はされていません。それほど、主人は僕たちを信頼しているのです。

他の二人の僕たちが多額のお金を預けてくれた主人の信頼に答えていったのに対して、この僕は主人の財産を損なわないために埋めてしまいます。当時、預かり物を埋めて隠し、もし、それが盗まれたとしても賠償する義務はなかったそうです。この僕は主人が信頼して預けたという事実を忘れ、ただ、主人からのものである財産を守ることを考えたのでしょうか。

5タラントン、2タラントンもうけた僕たちのことばの中には「預けた」と「もうけた」の対が見られます。しかし、第三の僕にはそれがありません。「もうける」の原文はケルダイノーで「手

に入れる、得<sup>とく</sup>をする」の意味です。第三の僕は主人が大金を預けたことの真意、つまり僕<sup>しもべ</sup>への信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>が分<sup>わ</sup>からないのです。それどころか、「恐<sup>おそ</sup>ろしくなり」と、主人に對<sup>たい</sup>する恐れ、不安を抱<sup>だ</sup>いています。

## ひとこと

今日の三つの朗読からテーマを取り上げるとしたら「神さまとの信頼関係」といえるでしょう。第一朗読には「有能な妻」とあって、妻が神の知恵<sup>あんじ</sup>を暗示<sup>あんじ</sup>しています。神さまはご自分からでる知恵（神の知恵）に全幅<sup>ぜんぶく</sup>の信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>を寄<sup>よ</sup>せています。知恵もまた、その信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>に込<sup>こ</sup>めていこうとします。11節にある「夫は心から彼女に信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>している」は、男性のわたしにとってはここに響<sup>ひび</sup>くことばになります。

第二朗読で味わいたいのは5節にある「あなたがたはすべて光の子」という一節です。洗礼によってキリスト者は光の子とさせていただきます。光の子は自分で光るのではありません。「光からの光」(ニケア・コンスタンチノーブル信条参照)である主キリストの光<sup>かがや</sup>を輝<sup>かがや</sup>かせるのです。「光の子」らしく生きるようにと、父である神さまはわたしたちへの信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>を込<sup>こ</sup>めて御<sup>おんこ</sup>子<sup>こ</sup>イエスさまをこの世へと送<sup>おく</sup>ってくださったのです。

福音朗読に見える、信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>する主人と、それに込<sup>こ</sup>めていく僕たち、込<sup>こ</sup>えられない僕についてはすでに指摘<sup>してき</sup>しました。神さまに従<sup>したが</sup>って生きていくとは、神さまの「信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>」に従<sup>したが</sup>って生きていくことに他ならないのです。

神さまがわたしたち一人ひとりを信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>しているのはどこで分かるのでしょうか。第一朗読に則<sup>そく</sup>して考<sup>かんが</sup>えてみたら、「人生の知恵」を神さまからいただいたことが他ならない神さまの人間に對<sup>たい</sup>する信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>を表<sup>あらわ</sup>していると思います。「人生の知恵」ばかりではありません。「信<sup>しん</sup>仰<sup>ぎやう</sup>」も、「能<sup>のう</sup>力<sup>りき</sup>」も、「性<sup>せい</sup>格<sup>かく</sup>」も、そして「いのち」すらも神さまからいただいたもの、与<sup>たま</sup>えられたものです。神さまからの一方的な人間への信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>の中で、わたしたちは生きてゆくのです。

この事実は時にはわたしたちにとって重いものです。一人ひとりをかけがえのないものとして信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>してくださるのは、重<sup>おも</sup>荷<sup>か</sup>にもなるでしょう。「恐<sup>おそ</sup>ろしくなり」という僕の気持ちは分からないでもありません。しかし預<sup>あず</sup>けられたものを「地<sup>ち</sup>中<sup>ちゆう</sup>に隠<sup>かく</sup>して」しまうのは残<sup>ざん</sup>念<sup>ねん</sup>な気もします。

11月は死者の月であり、終末の月です。今日の朗読箇所は一読したところで終末との関<sup>かん</sup>わりは見<sup>み</sup>いだせないかもしれません。しかし、神さまのとの信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>関係の中で「今」を生きる。そして与<sup>たま</sup>えられた「知恵」を「いのち」を「隠<sup>かく</sup>して」しまうのではなく、精一杯生きることこそ終末を生きることなのです。終末とはこの世の向<sup>むか</sup>こうにあるのではなく、「今」、「ここに」生<sup>せい</sup>起<sup>き</sup>するものなのです。